

## あらくさ句会・令和二年一月例会 選評

【日時】令和二年一月二十五日（土）

午後三時から

【場所】居酒屋「もりや」

【出席者】眸子、温智、所山、三省、万里、軽博、至茶、耕田、一笑、曲枝、素乱、陸奥海、丁夫（十三名）

（八谷・見学）

【投句者】眸子、温智、嶋尾、所山、三省、万里、りな、軽博、開九、凡生、至茶、浪知、白塵、耕田、英堂、一笑、曲枝、素乱、伸行、端石、陸奥海、丁夫

（二十二名）

【兼題】「令和」

【投句】四句投句 【選句】七句選

《あらくさ選評》 稲田眸子

腑に落ちぬ判決ありや冬の雨

至茶

このところ腑に落ちない判決が多い。何の関わりも何の罪も無い通りすがりの命を身勝手に残忍にも奪っているにも拘わらず、謝罪無し！人が苦しむ姿が見たいと嘯く加害者。尚も被害者やご遺族の心を踏みにじるような言葉を発し、更に、「又やる」と暴言を吐く鬼のような男が「無期懲役」とは…。

判決に限らず、腑に落ちぬことが頻発しているのを嘆くばかりである。その憤慨を十七文字で表現したのは掲句。「判決ありや」を「判決のあり」と静謐な詠み方とすると、「冬の雨」らしくなる。作者の憤りを表現したかったのだ。

底冷えや朝餉の匂ひ布団まで

耕田

冬になって気温が下がると、目覚めが悪くなる。目が覚めても、寒い朝は布団から出るのは億劫になる。特に、底冷えの日は…。

私達は日光を浴びる事で一日の時間の移り変わりを感じ取り、体内時計が夜の就寝モードから日中の活動モードに切り替えている。その体内時計をくすぐっているのが朝餉の匂い。味噌汁とご飯、そして、卵焼き…。さて、そろそろ活動モードへチェンジしなければと眩きながら朝の食卓へ向かったに違いない。

移ろいゆく季節の中の、厳冬の一齣をさりげなく切り取った句。

何時からぞ婦唱夫随の年用意

三省

「お宅は夫唱婦随？」「それとも婦唱夫随？」と聞かれ、皆さんはどう答えるであろうか。我が家では夫唱婦随と信じているが、時々、うまく踊らされているのかと感じる時がある。「おやじ」が威張っているようであって、実は「かかあ」が采配しているのだ。

新年を迎えるために、掃除・注連縄張り等の準備をすることを年用意という。これに関連して「煤逃げ」という季語がある。煤払いの際に邪魔にならないよう、自室に籠っている夫のことを指している場合が多い。最近では、自室に籠らずに、ある人はパチンコ屋へ、ある人は図書館へ行く…、そんな話を身近で聞かす。

掲句の夫はそんな不埒はしない。妻の年用意を黙々とサポートしているようだ。しかし、「何時からぞ」からは、複雑な夫の心境も伺える。面白い句である。

施設にも令和の初日母白寿

軽博

日本では、古来から、初日の出と共に神様が降臨されると信じられてきた。その神様は、五穀豊穡をもたらしてくれると言われる穀物や農耕の神様である「歳神様」。初日の出には、歳神様を拜んで、その年の豊作や健康、幸運などを祈るといふ意味があったのである。

初日は貴賤分け隔てなく、遍く照らし、恵みを与えてきた。施設に入居しておられる方々にも届き、施設に入居している方々もその初日を拝み、新年を迎えるのである。この句は、その中のお母様を包み込んでいる姿を詠んだ。白寿のお母様を思う心が伝わってくる。

大地より今日覚めたり初筑波

曲枝

水原秋櫻子には、筑波山縁起と題する五句連作がある。

わだなかや鶉の島群るゝ島二つ

天霧らひ雄峰は立てり望の夜を

泉湧く女峰の萱の小春かな

国原や野火の走り火よもすがら

蚕の宮居端山霞に立てり見ゆ

安東次男は、この連作を次のように評釈している。

「筑波山縁起」昭和三年一月号『ホトトギス』雑詠欄に発表されたときは連作とことわってはいないが、短歌の連作にならって秋櫻子をはじめた一形式である。この連作は、最初に見取り図がある。つまり、全体を絵巻になぞらえ、まず最終句に霞の山（春）を配した。それとの関連で初句を夏季とし、なお、筑波山がむかし海底から隆起したと伝えるところにもとづいて、景を海にとっている。第二句秋、第三句冬、第四句は冬にちかい春季をえらんでいる。「蚕の宮居」は筑波山麓にある蚕影神社。

「大地より」は太古の昔を思い描かせ、大きな句になった。

越え難き九十路の坂や屠蘇祝ふ

所山

日本では九十歳以上の高齢者が初めて二百万人を超え、人生百年時代がまさに現実になろうとしている。しかし、誰もが健康なまま長生きできるわけではない。寝たきりになったり介護を受けたりすることなく、元気に自立して生きられる期間を示す「健康寿命」は、

男性が七十二歳、女性が七十四歳という統計もある。

新年を迎えた作者が漏らした言葉が「越え難き九十路の坂」。実に重い言葉であるが、沈痛ではない、心は乱れておらず安らかである。それは「屠蘇祝ふ」の言葉から伺える。

これからは俳句に親しみ、先達としてご指導頂きたいもの。ご自愛を切にお祈りするばかりである。

死は間近こんなに身近春彼岸

英堂

「色即是空」「空即是色」、「空即是色」「色即是空」……。

「色即是空」には全てのもは儚く、永遠に存在する事はなく、いつかは死んでしまうという「死」のイメージ。そして「空即是色」には、実体のないところから、全てのもが生み出されるという「生」のイメージが感じられる。

人間の行きつく先は死とわかっていながら、私たちは死についてあまり意識していない。そのことを意識させてくれるのが、近い人、黄泉の国へ見送ったり、あるいは、三月の春彼岸、九月の秋彼岸であろう。作者は、この冬に近い人を失い、春のお彼岸を迎え、「死」を強く意識したのである。

「死は間近」は自らの悟りでもあり、また友人の死を知ったときの切実な気持ちでもあろう。「死は間近こんなに身近」と畳みかける表現がこの句の眼目であろう。

◇この一句◇ 林 曲枝

何時からぞ婦唱夫随の年用意

三省

俳句に四字熟語を用いると堅い句になりがちだが、夫婦を逆転させた造語で面白い句になった。この逆転は、我が家を含め同じような家が多いのだろう。何時からではなく初めからという人もいるか

も知れない。

若い頃は、正月のしきたりに妻が自信がなかったのか、夫の指示に従っていたが、おせちは宅配、正月飾りはスーパードという時代になり、夫の順番はなくなった。もともと、婦唱夫随は年用意に限らなくなっているが。

◇あの一句◇ 芳賀一笑

何時からぞ婦唱夫随の年用意

三省

この句は中七の造語の「婦唱夫随」と四字熟語の「夫唱婦随」では、読み方は同じでも意味が真反対となる。

選句は、当然のことながら視覚に頼ることになる。

新年を迎えるための大掃除やら家事のこまごました仕事、松飾りや注連縄飾りの手配といった「年用意」は親の世代から自分が見てきた事象により記憶の中に形成されてきたものである。作者は、これまで家事など全く見向きもしない亭主閑白であったのであろう。

「何時からぞ」の「ぞ」に「何時頃からだろうか？」と訝り、問いただす意を表す係助詞を用いているのが秀逸で、ウイットとユーモアにあふれた句である。

◇さらにもう一句◇おかりな

越え難き九十路の坂や屠蘇祝ふ

所山

人生長くなっている。それでも、いろいろなことを思い浮かべるだろうか、九十路の新年はしみじみとめでたい。四季折々に感謝して自然を愛でる感性がいいのか、つらいこともうれいことも俳句に織り込み、九十路の坂を超えていく生き方にあやかりたい。

